

モンゴル年代記がチベット年代記に与えた影響について

——特にモンゴルの祖先説話を中心として——

石濱 裕美子

はじめに

チベットの仏教文化は元朝以降、チベットの北に位置するモンゴルに大きな影響を与えた。そのため、『元朝秘史』（以下 NT）を除くモンゴル年代記にチベット文献の影響が強く見られることは従来から知られていることである（註1）。しかし、本稿においてはこの逆、即ちモンゴル年代記がチベット年代記に与えた影響について述べてみたいと思う。

結論から先に述べると、チベット年代記において同一の対象を扱った部分を比較すると、17世紀以前のチベット年代記（『赤冊』（以下 HDT）、『王統明示鏡』（以下 GRM）、『青冊』（以下 DNG）、『新赤冊』（以下 DMS）、『賢者の宴』（以下 KGT）等の、元朝と直接交渉のあったサキャ派、カルマ派の年代記）と18世紀以降に成立したチベット文年代記（註2）（『パクサム・ジョンサン』（以下 PSJZ）、トガン・ロサン・チューキ・ニーマの『一切宗義善説水晶鏡』（以下 TGM）、ジクメ・リクペー・ドルジの『モンゴル仏教史』（以下 HBC）等ゲールク派のもとで成立した年代記）では物語の本筋にも関わる説話の記述が大きく相違していることが分かる。一方17世紀頃からモンゴル地方でモンゴル年代記が次々と成立したが、その作者は執筆にあたり17世紀以前のチベット文献を手にしていながらそこに書かれている記述をとらず、独自の史料に基づいて著作を行なった。ところがこのモンゴル年代記の記述と18世紀以降に成立したチベット文年代記の記述は非常によく合致するのである。このことから、モンゴル年代記は18世紀以降に成立したチベット文年代記に影響を与えたのではないかという推測が可能になろう。本稿では18世紀以降のチベット文年代記にこのような変化が生じたのは、モンゴル年代記特に『エルデニ・イン・トプチ』（以下 ET）の影響による可能性があることを指摘したいと思う。

但、19世に入るとモンゴル年代記にも漢文資料を用い

ることにより資料を比較して列記する姿勢がようやく現れる。本稿で言及するモンゴル年代記とはせいぜい18世紀前半くらいのものでほしい。また、オイラトの年代記はその構成がハルハや内モンゴルのものとは全く異なるので、ここでは対象としないこととする。

それでは以上述べた結論の論証を行なってみてみたいと思う。問題の性質上モンゴル年代記とチベット年代記が同じ対象を扱った部分を取り上げることが有効と思われるので、以下の4つの項目——1. チベット・モンゴル同祖論。2. チンギス・ハーンのクンガーニンポ招請。3. ゴダンのハン即位。4. チンギス・ハーンの祖先系譜に見られる歪み。——に絞って17世紀以前・以後のチベット年代記の対照・比較とモンゴル年代記の記述の検討を行なって行きたい。これら4項目は、17世紀以前のチベット年代記のいずれにも見られないが、18世紀以降のチベット年代記とモンゴル年代記には存在する説である。紙数の限りもあるので、第4項を詳説し残る3項目は簡単に触れるにとどめたい。

1. チベット・モンゴル同祖論

17世紀以前のチベット年代記には、チベットとモンゴルの王家の血筋を繋げる記述は存在しないが、ETを始めとするモンゴル年代記と18世紀以降に成立したチベット文年代記 PSJZ、HBC には、吐蕃王家の始祖ニャーティ・ツェンポ (gNya' khri btsan po / Küjügün sandaltu qaγan) 王から数えて七代目のスイプティ・ツェンポ (Srib khri btsan po / Altan sandaltu qaγan) の三子のうちシャチ (Sha khri / Börte cinu) という名のものがコンボ地方からモンゴルの地に来てモンゴルの王家の始祖ボルテ・チノになったというチベット・モンゴル同祖説話が存在する (ET, pp. 71-72, PSJZ, 300b7-301a2)。

2. チングス・ハーンのクンガーニンポ招請。

17世紀以前のチベット年代記によるとチベット仏教の一派サキャ派がモンゴルと本格的な交流を始めるのは、グユク・ハンの弟ゴダんと、サキャ派の高僧サキャ・パンディタとの邂逅からとされている。しかし、モンゴル年代記はこの関係をチングスにまで遡らせ、その接触の対象もサキャ・パンディタより二代遡るサキャ派の座主クンガー・ニンポとする。このチングスよるクンガーニンポ招請説話は、ETを始めとするモンゴル年代記と18世紀に成立したPSJZ, TGM, HBCに現れる。以下の資料はETとPSJZの当該箇所対訳であるが、ETの方が多少詳しいとはいえ、物語の構成がほぼ一致していることが読み取れると思う(註3)。

それから、[チングス・ハーン] 45才の丙寅年に、チベットのクンガー・ドルジ (Külge dorji) 王のもとへ出馬した時に、チベットのハンはニルフ (Nilqu) という名のノヤンを始めとする300人の人によって、多くのらくだ・貢物を献じて、「降伏しよう」と使者を派遣した。ナチン・ツァイダムにおいて、主(チングス・ハーン)と出会うと、主は許されてハーンと使者二人に対し、多量の贈物を与えて帰した。主はサキャのチャク翻訳家アーナンダ・ガルバ(クンガー・ニンポ)というラマに、次のように手紙を献じて、ニルフ・ノヤンを折り返し派遣して、「汝を招くことになろう。[しかし]私の世間で行なう仕事が未完であるために、[今は]招くことはできない。私はここから汝を信仰する。汝はそこから、私を護れ」と書を与えた。そのようにして、ガリ三県より以東、三県八十八万黒チベット国を降したのである。(ET, pp.111-112)

45才の時に、チベットのウに至った時、摂政ジョーガー (Jo dga')とツェル派のクンガー・ドルジェ (Kun rdor) 等が迎えて、盛大な宴会を行なって、ガリ三県とウ・ツァン四翼、ロカム (lho khams) 三県一切を献じた。それから、ツァンのサキャにいるラマ、クンガー・ニンポに贈物とともに手紙を使者に托して、「今は、若干の王政の仕事に属する軍事上の仕事が未完なので、それが終わった時に、汝が息子とともにモンゴル国において勝者の教えを広めるように」と仰ったので、彼自身には実際に会わなかったけれども、遠くからラマとして信仰してチベットの民全てを税から解放して、ウ・ツァンの三依、僧伽に供養なさって、仏教の施主・法王となった (PSJZ, 302a6-bl)

3. ゴダンのハン即位

DMSを除く17世紀以前のチベット年代記には(石浜1986, p.186), オゴタイ・ハンの子、ゴダンがモンゴルのハンとして即位した記述はない。しかし、ETを始めとするモンゴル年代記と18世紀以降に成立したPSJZ, TGM, HBCにはそれが存在する。以下の資料は、ETとPSJZの当該箇所対訳である。短い資料であるが、文の構成に始まり、生まれた年、即位の年月日が一致していることが判ると思う。

その子はグユク、ゴダンの二人である。兄はグユクという。乙丑年に生まれ、29才の時の癸巳年にハン位についた。六ヶ月たったその同年に死んだ。彼の弟はゴダンという名前で、丙寅年に生まれ、29才の甲午年にハン位について、(後略) (ET, pp.133-134)

そののち、彼の息子グユクとゴダン二人のうち前者が乙丑年に生まれ、癸巳年に六ヶ月在位した。そののちゴダンが丙寅年に生まれ甲午年に王座についた。(後略) (PSJZ, 303a3-4)

以上3つの例を簡単に検討したが、これらの検討を通じて17世紀以前に成立をみたチベット年代記と、18世紀以降に成立をみたチベット文年代記のモンゴル、あるいはモンゴル・チベット関係の記述内容には大きな相違があること、そして18世紀以降に成立したチベット文年代記が17世紀に成立したモンゴル年代記、例えばET等と類似する記事を有していることを確認できたと思う。以上のことから18世紀以降に成立するチベット文年代記が17世紀以前に成立したチベット年代記とその内容が異なるのは、これらのモンゴル年代記に影響を受けた結果生じたという仮説を立てることが可能となる。この仮説を裏付けるものとして、以下にモンゴルの祖先系譜に対する考察を詳しく行なってみよう。

4. チングスハンの祖先系譜に見られる歪み

チングスの祖先の系図を記す資料は、NTを始めとするモンゴル年代記、ペルシャ語年代記であるラシード・ウッディーンの『集史』(以下Ra.), 漢文資料『輟耕録』、『元史』太祖本紀、宗室世系表等と、チベット年代記がある。このうち漢文の三史料には、13代目のポンドチャル以降の系図しか記されていない。また、チベット年代記はボルテ・チノ以降の直系のみが列記されている。一方Ra.にはボルテ・チノ以前の祖先説話も存在する。

祖先系譜の検討は、小林高四郎氏がRa.の史料となっ

た『アルタン・テプテル』の性質究明の過程でNTとRa.の祖先系譜の違いを指摘されたことに始まり(小林1948),村上正二氏が族祖伝承を扱う過程でやはりNTとRa.の祖先系譜の違いについて言及されている(村上1970-76, 1973)。一方, Ra., NT, HDTにおけるチンギスハンの祖先系譜の比較がS. Bira氏によって行われている(Bira, 1977, pp.321-325)。この研究は優れて開明的なものであったが, 時代の制約から, 氏が使用されたHDT(シッキム本)並びにRa.の写本(Berezin校訂本)はあまり状態のよいものではなかったことが惜しまれる。吉田順一氏は祖先系譜部分の漢文史料の相互関係の考察と, 『アルタン・テプテル』の性格の探求を行なった(吉田, 1984)。

以上述べたNT, HDT並びにRa.の対照検討の研究を踏まえた上で, 筆者はチベット資料を加えてこの祖先系図に関して若干の考察を行なって見たいと思う。以下の表はペルシア文史料Ra.とチベット史料とモンゴル史料にみられるチンギス・ハンの祖先の系譜を記したものである。Ra.はイスタンブール図書館所蔵の版の焼き付けを使用し(註4), HDTはシッキム本ではなく近年中国より出版された印刷本を用いた(文末略号表参照)。紙数の限りもあるので17世紀以前のチベット年代記はHDT, GRM, KGTによって, モンゴル年代記はNT, ET, 18世紀以降のチベット文年代記はPSJZをもって代表させた。

チンギス・ハンの祖先の名称対照表

NT. 1-3,17,23,43-50; Ra. pp.9-51; HDT. pp. 28-29; GRM. p.21; KGT. p.1413; PSJZ. 301a3-b4; ET. pp.71-76;

(1) ボルテ・チノ

NT Börte Cino

Ra. Bürte Jina

HDT sBor ta che

GRM sPor tha che

KGT sBor tha che

ET Börte Cinu-a

PSJZ Bor ta che no

(2) バタチカン

NT Bataciqan

Ra. Bataji Qiyān

HDT Baa daa chii gan

GRM Ba chi khan

KGT Ba da / Chi gan

ET Batasγan / Bata caγan

PSJZ Pa ti sahan / Ba ta cha gan

(3) タマチャ

NT Tamaca

Ra. Tamāj

HDT Ṭham chag

GRM Tham cha

KGT Tham chag

ET Tamacag

PSJZ Te me cag

(4) コリチャル・メルゲン

NT Qoricar Mergen

Ra. Qijū Merkān

HDT khyi ji mer khan

GRM Khi che mer kh(g)an

KGT Khyi ji mer khan

ET Qoricar Mergen

PSJZ Ho re char mer gen

(5) アウジャム・ボロル

NT A'ujam Boro'ul

Ra. Qūjam Buqrūl

HDT La 'ur byang sbo ro 'ol

GRM A'u ja(o)m sbo ro 'ol

KGT La'u ngag spo rol

ET Aγujam Boγorol

PSJZ A gwo cham bu' i ral

(6) サリカチャウ

NT Sali Qaca'u

ET Sali Qalcaqu

PSJZ Sa li gwal ja gwo'u

(7) エケ・ニドゥン

NT Yeke Nidūn

Ra. Yeke Nidūn

HDT Pas ka ni dun

GRM E ke(a) de n(')un

KGT E ka ni rug

ET Yeke Nidūn

PSJZ Ye khe nu tun

(8) シム・ソチ

NT Sem Soci

Ra. Sem-Sāūjī

HDT Sems za'u ji

GRM Sems za'o ji

KGT Sems za ba'o

ET Semsoci

PSJZ Sam su ci

(9) カルチュ

NT Qarcu

Ra. Qāli Qājū

HDT Kha chu

GRM Dab chu

KGT Kha chu

ET Qali Qarcu

PSJZ Ha li har chu

(10) ボルジギタイ・メルゲン

NT Borjigidai Mergen--
 ET Brjigidai mergen
 PSJZ Bor ci gi ta'i mer gen
 NT MongYoljin Qo'a
 ET MongYoljin Yuu-a
 (11) トルゴルジン・バヤン
 NT TorYoljin Bayan--
 ET TorYaljin Bayan
 PSJZ Dur la cin paa yan
 NT Boroqcin Qo'a
 ET BorYacin Yuu-a
 PSJZ Bo rog chen gwa'u
 (12) ドブン・メルゲン (脱奔咩哩健)
 NT Dobun Mergen--
 Ra. Dübün Bāyān
 HDT Do bun mer khan
 GRM Dor bun cher khan
 KGT Ngo mun man
 ET Dobun Mergen
 PSJZ To po mer gen
 アラン・ゴア (阿蘭果火)
 NT Alan Qo'a
 HDT Nag mo a lan kho
 GRM Nag mo a lan
 KGT Nag mo yi lan
 ET Alun Yuu-a
 PSJZ btsun mo A lon gwa
 (13) ボドン・チャル (孛端叉兒)
 NT Bodoncar MunqaY
 Ra. Būdunjar
 HDT Bo don char mung khan
 GRM Bo don char mu khag
 KGT Bo don char mun khag
 ET Bodancar MungqaY
 PSJZ Po ton char mong hag
 (14) バリンシイラトカピチ (八林昔黑(里)刺秃合
 (哈)必畜)
 NT Barim si'iratu Qabici
 Ra. Būqā Būqtāi
 HDT Ga'i chi / sBe khir
 GRM Ga bi chi / sBe kher
 KGT Ga'i chi sbi khir
 ET Qabici baYatur / Bekir baYatur
 PSJZ Ha bi che paa thur / Bii kher paa thur
 (15) メネン・トドン (咩撚篤敦)
 NT Menen Tudun
 Ra. Dūtūm Menen
 HDT Ma nan tho don
 GRM Ma nan tho don
 KGT Ma nan tho non
 ET Maq-a Tudan
 PSJZ Ma haa tho tan
 (16) ハチクルク
 NT Qaci Külüg

ET Qaci Külüg
 PSJZ Ha ci khu lug
 (17) カイドウ (海都)
 NT Qaidu
 Ra. Qāidū
 HDT Ga'i thu gan
 GRM Ga'i thu gan
 KGT Ga'i thug ga
 (18) バイソソクル (拜姓(住)忽児)
 NT Bai Singqor Doqsin
 Ra. Bāi Sunkqūr
 HDT Ba'i shing / Khor dog shing
 GRM Ba'i shing thor dog shing
 KGT Bi'i shing / Khor thog shing
 ET Bayi singqor DoYsin
 PSJZ Bii shing hur tog shin
 (19) トムビネ・セチェン (敦必乃)
 NT Tumbinai Secen
 Ra. Tūmbena Khān
 HDT Dum bi na'i khan
 GRM Bu dum bi na(i)'i khan
 KGT Du ma 'bi ha'i gan
 ET Tumbinai Secen
 PSJZ Hom pa na'i che chen
 (20) カブル・ハン (葛不律寒)
 NT Qabul Qan
 Ra. Qabul Khān
 HDT Ga bu la khan
 GRM Gal bu khan
 KGT Ga'u la ban
 ET Qabul Qan
 PSJZ Ha bul rgyal po
 (21) バルタン・バートル (八哩(里)丹)
 NT Bartam Ba'atur
 Ra. Bartān Bahādur
 HDT Bar than ba dur
 GRM Bar than ba dur
 KGT Bar than pa 'ur
 ET Bardam BaYatur
 PSJZ Bar tam paa thur
 (22) エスゲイ・バートル (也速該)
 NT Yesügei Ba'atur
 Ra. Yisūkāi Bahādur
 HDT Ye sur ga ba dur
 GRM Ye bun ka ba dur
 KGT Ye bur ga ba par
 ET Yisügei BaYatur
 PSJZ Ye su khe'i paa thur

17世紀以前の資料は言語によって分けられ、漢文の三史料、モンゴル年代記 NT、ペルシャ語史料 Ra., チベット語の各種年代記と4系統に分かれる。そこで、ま

ずこれらの史料の相互関係を検討する中で、記述内容によってどのようなグループに分けることができるかを探って行きたいと思う。

表の6番のサリカチャウと10番のボルジギタイ・メルゲン、11のトルゴルジン・バヤンと16のハチ・クルクはNTとETには現れるが、Ra.と17世紀以前のチベット年代記にはこの四人の人物は現れないこと(註5)、またNTとETではコリチャル・メルゲンとされている人物が、チベット文献とRa.ではキジ・メルゲン並びにキジュ・メルゲンと極めて近い音を有していること(4番)、またNTとET並びに漢文資料ではバリン・シイラト・カピチと称される人物が、Ra.とチベット資料ではハビチ・バートルとそれを継いだベキル・バートルという二人の人物を挙げる点で一致していること(14番)、また、トンビナイ・セチェンはNTとETではトンビナイ・セチェン、漢文資料ではトンビナイと記されるが、チベット年代記とRa.ではハン号をつけてトンビネ・ハンと記されていること(19番)等の諸点から、記述内容によって分けると先ほどの4言語資料は、17世紀以前のチベット年代記(註6)とRa., NTとETと漢文資料のグループとの二系統に分かれることが判る。ペルシャとチベットという全く異なった国で元朝崩壊後比較的初期に成立した二史料が一致していることと、NTの英雄叙事詩的性格を考え合わせた場合(註7)、Ra.とチベット年代記のグループが示す祖先系譜の方が、NTの示す祖先系譜よりも作為のすくない段階にあると言えるかもしれない。

ではPSJZ並びにそれを踏襲した18世紀以降のチベット文年代記TGM, HBCはどちらのグループに近いのであろうか。6, 10, 11, 16番の人名はRa.とチベット資料には現れずNTとETには現われている人物であるが、いずれもPSJZには存在している。また、4番の人名の綴りもPSJZはNTやETに現れる綴り「コリチャル・メルゲン」に従っている。同様のことは2, 5, 8, 9, 14, 15, 19番についても言える。これらの比較から、PSJZの記述乃至表記法は、必ずNT並びにETと一致した記述をしていることが分かる。

さらに詳しい比較を行なうと、PSJZの記述はNTよりもETによっていることが判明する。例えば14番の人物を見ると、この人物はNTとETでは説が分かれ、NTではバリン・シイラト・カピチという人物であるが、ETではこの人物の代わりにハビチ・バートルと、ベキル・バートルという二人の人物が入る。一方、PSJZの記述はETの方に従っているのである。同様のことは2, 9, 15番についてもあてはまる。以上のことからPSJZ

の作者スムバ・ケンボは、モンゴルの祖先の系図作成に関してETを資料にしていたと結論できると思う。

おわりに

以上、僅か4つの例ではあるが、17世紀以前と18世紀以降ではチベット文献におけるモンゴルの章の記述内容が異なること、そしてその違いはモンゴル年代記の影響によって生じた可能性が存在することを述べてきた。無論、筆者の検索の及ばない、乃至は既に現在は失われた何等かのチベット文献がモンゴルの年代記の記述に影響を与えたという可能性は捨てきれない。しかし、本稿で扱った少なくとも3つの例は全てチベットとモンゴルとの接触がテーマになっているものであることは注意すべきである。始めに記述に歪みを生じたのがチベット文献であれモンゴル文献であれ、それはチベットとモンゴルが接触することによって起きたものであることは疑問の余地のないことである。以上本稿が指摘した事実により、元朝における仏教史の研究に際しては後代に成立した文献を安易に用いることは避けるべきであることが提起されたと思う。今後さらに、17世紀に本格化するチベットとモンゴルの接触がチベットの従来の史観にどのような変容を生じせしめたかについて研究を重ねて行きたいと思う。

註

- (1) モンゴル年代記がチベット史料を原典として用いていたことは、モンゴル年代記のロブサン・ダンジンの『アルタン・トブチ』や『アサラクチ・ネレティン・テウケ』等の例においてW. Heissig氏並びに筆者が文献学的に明かにしている(W. Heissig, 1957; 石浜1986)。
- (2) 18世紀以降に成立したチベット年代記PSJZ, TGM, HBCはチベット語で書かれてはいるものの、成立地が青海であり、筆者もTGMのトガンを除けば皆モンゴル人であることから(石浜1986, P. 18, n. 1)、純粋なチベット年代記とは言い難い側面が有る。そのため本稿では18世紀以降に成立したチベット年代記はチベット文年代記として伝統的なチベット年代記との微妙な差異を表した。
- (3) チンギス・ハンのクンガーニンポ招請に関するPSJZの記述はTGMに引き写されたこと、またPSJZのその記述がETによる可能性があることは福田氏によって指摘されている(福田1986a, p. 3; 1986b, pp. 76-78)
- (4) Ra.の祖先系譜の人名表記は早稲田大学の宇野伸

弘氏の御教示によるものである。

- (5) このことから村上正二氏はこの四人の存在を疑問視されている(村上1970-1976, p11, 13-14, 50並びに巻末のモンゴル部族の系図参照)。
- (6) チベット年代記も初期に成立したHDTと最後に成立したKGTとでは、その記述に明かに精粗の差がある。祖先系譜をみれば分かる通り、TNGに始まるモンゴル王統の誤記はKGTに引き継がれ、KGTの綴りでは元のモンゴル名が全く復元できない状態となっている。また、ここでは史料を挙げていないが、成立の古いGRMですらチングス・ハンの末子であるトロイの妻のサイン・エカを、トロイの子と誤解しており、正しくトロイの妻と解釈するHDTとの食い違いに悩んだKGTの著者は、相互に矛盾する記述をKGTに残している。このように、チベット年代記にも時代を経たことから生ずる、誤転写、誤解はある。しかし、本発表で取り上げた4つの例にみる大きな違いに比べれば、一定の範囲内におけるずれとして片付けられる問題と言えよう。
- (7) 吉田氏はNTを漢文史料等と比較検討することにより、NTは年代記的体裁を有しているが、忠実な歴史記述、年代記的技術を意図したものではなかったと結論され、NTの年代上および意味内容上のゆがみや誤りはNTの英雄叙事詩的性格と関係するかもしれないとされている(吉田1968)。

略号一覧(書名、著者名、著作年次、出版地、出版年)

- ET 『エルデニ・イン・トプチ』蒙古源流 Saγan secen, 1662, Erdeni yin tobci. Monumenta Historica, Tomus I. Facs. I., Ulan bator, 1961.
- NT 『モンゴル秘史』1-3巻, 村上正二, 平凡社, 1970-1976年
- Ra. 『集史』, The Successor of Genghis Khan, J.A. Boyle, London New York, 1971.
- HDT 『テプテルマルボ』赤冊, Kun dga' rdo rje, 1346-1363, Deb ther dmar po, 民族出版社, 1981.
- GRM 『ゲルラブ・セルワイ・メロン』王統明示鏡, bSod nams rgyal mtshan, rGyal rabs gsal ba'i me long, 1368, B.I.Kuznetsov, Scripta Tibetana I. Leiden 1966.
- HBC 『蒙古仏教史』'Jigs med rig pa' i rdo rje, History of Buddhism in Mongolia, Louis Ligeti, New Delhi, 1981. SPS. Vol.271.

KGT 『ケーペーガートン』賢者の宴, dPa bo gtsug lag 'phreng ba, 1545-65, Chos 'byung mkhas pa' i dga' ston, 1545-65, 民族出版社, 1986.

PSJZ 『パクサム・ジョンサン』, Ye shes dpal 'byor, 'Phags yul rgya nag chen po bod dang sog yul du dam pa' i chos 'byung tshul dPag bsam ljon bzang, 1748, Edited in Collected Works of Sum-pa-mkhan-po by Lokesh Chandra, Vol. 1 (Ka), SPS, Vol. 214, New Delhi, 1979.

TGM 『一切宗義善説水晶鏡』, Thu' u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma, Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa Legs bshad shel gyi me long, 1800-1802

参考文献一覧

W. Hession(1957) Die Familien und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen, Teil I, 16.-18. Jahrhundert. Asiatische Forschungen, Bd. 5. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

(1977) Problems of History, Culture and Historiography of the MPR,

石濱裕美子(1986)「モンゴル年代記の史料上の性格」『西藏仏教宗義研究』第四卷第一章 pp.21-28.

福田洋一(1986a)「トゥカン『一切宗義』「モンゴルの章」の構成と歴史資料としての性格」『西藏仏教宗義研究』第四卷第一章 pp.1-11. (1986b)

「『パクサムジョンサン』に記述されたサキャ派・元朝関係記事の特殊性」『西藏仏教宗義研究』第四卷第四章 pp.76-78.

小林高四郎(1948)「ラシード・エッディーンに見えたる民族学的資料について——『アルタン・デブテル』なる書の性質解明を中心として」『民族学研究』12-3.

村上正二(1964)『モンゴル部族の族祖伝承(1)(2)——とくに部族制社会の構造に関連して』『史学雑誌』73:7-8.

吉田順一(1968)「元朝秘史の歴史性——その年代記的側面の検討」『史観』78.

(1984)「『元史』太祖本紀の研究——特に祖先物語について——」『中国正史の基礎的研究』早稲田大学東洋史研究室編早稲田大学出版会

Vostikov, A. I. Tibetan Historical Literature. Tr. H. Ch. Gupta. Soviet Indology Series. Calcutta: Indian Studies, 1970. (Originally published in 1962.)